

更級日記 門出

東海道

にある常陸国

のつと

育つ

たる人、
の私は

①あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、

どんなにいかばかりかはあやしかりけむを、

どのように思ひ始めけることにはか、世の中に物語といふものの

ある そうだ が、それ なんとかして 見ばやと思ひつつ、

手持ち無沙汰な 夜遅くまで起きているとき

③つれづれなる 昼間、宵居

などに、姉、継母などやうの

人々の、その物語、かの物語、光源氏のある やう など、ところどころ

語るを聞くに、

の

ますます 見たさ が 暮る けれど 私 願う とおり とおり (草子も持たないで)
④いとど ゆかしさ まされ ど、わが思ふ ままに、そらに
暗記して

形動

どうして 覚え語つてくれるだろうか、いや、語つてはくれない。
いかでか おぼえ語らむ。

とても じれつたいの にまかせて 等身大
⑤いみじく 心もとなき ままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひ

人のいない間に こつそり 仏間に
などして、人まに みそかに 入つて は

⑥「京に とく 上げ 給ひて、物語の多く候ふ」がございますと聞いているそれを

丁

伝聞・体

ある限り見せ 給へ。」と、身を捨てて額をつき、祈り申す ほどに、
ある限り見せ 給へ。」と、身を捨てて額をつき、祈り申す ほどに、
ある限り見せ 給へ。」と、身を捨てて額をつき、祈り申す ほどに、
ある限り見せ 給へ。」と、身を捨てて額をつき、祈り申す ほどに、

⑦十三になる年、上らむ とて、九月三日、門出して、いまたちといふ所

移動した
に移る。

目的

いうことになつ

⑧年ごろ 遊び慣れつる所を、あらはに
長年 外からまる見えになるよう
大騒ぎし 亂雑に取り外し

立ち騒ぎで、

⑨日の入りぎは の、いと すごく
沈む間際 一面に霧の立ちこめ
乗ろう で ひどくもの寂しい感じで
車に乗る とて、うち 見やり たれ
何度も ひどくもの寂しい感じで
人ま は参り つゝ、額をつき し薬師仏の立ち
お参りし つい た てお祈りし
に ふと 目をやつ た
偶発条件 ところ

格助詞

霧りわたり たるに、
立ちこめ ている とき

車に乗る とて、うち 見やり たれ
乗ろう し

偶発条件

⑩人の見ていない間 人が見え、それ
人ま に は参り つゝ、額をつき し薬師仏の立ち
お参りし つい た てお祈りし
見捨て奉る 申し上げることが 自分が見え、それ
見捨て奉る 申し上げることが 自分が見え、それ
悲しくて、人知れず うち 泣かれぬ。 自然と
悲しくて、人知れず うち 泣かれぬ。 自然と
泣かれぬ。 自然と

(11) 門出したら
た
(て移つ)

周囲の垣根

間に合わせ
かりそめ

であつて

部などもなし。
ない

⑫簾かけ、幕など引きたり。
⑬南ははるかに野の方見やらる。
——
引き回している
はるか遠くに
見え
自発

⑯ 東、西は海近くて、いとおもしろし。
——が
とても明るく美しい

が
一面に立ちこめ
た
て、いまじう
たいそう
をかしけれ
趣が深い
ば、朝寝なども
の
せし
ず、ないで

あちこちを
ては出發してしまようよくな
に立ちなむこともあはれに悲しきに、
たなむこともあはれに悲しきに、
辺り一面を暗くして國に出るに、境を出でて、
に、が

下総の国のかたといふ所に泊まりぬ。
泊まつた

(17) 仮小屋 浮い てしまふ が
庵なども浮きぬばかりに雨
降り 降つ
など たり
すれ する
ば ので

恐ろしくて寝も寝られず。
寝ることができない

野原の中 で のように高くなつて いる
⑯ 野中 に 丘だち たる所に、ただ木ぞ三つ立て る。

⑰ その日は雨にぬれたる物ども干し、国に立ち遅れたる人々待つ
とて、そこに日を暮らしつ。
たなびきを上総の出発し遅れた。

⑲ 十七日のつとめて、立つ。
早朝 出発する

昔、下総の国に、まのの長といふ人住みけり。
まのの長が 長者いう住んでいた
ひき布を千むら、万むら織らせ、さらさせける
千巻 万巻
私も たという人の
が家の跡とて、
船頭がいうこと

深い川を舟にて渡る。

昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きなる柱、川の中に四つ立てり。
が 残つて ていりで 大きい
私も (次の歌を詠んだ)

人々歌よむを聞きて、心の内に、

朽ち果てしれないこの川
朽ちもせぬこの川
柱残らず
朽ち果てしれないこの川
柱残らず

ければ
係(順接確定)

長者の屋敷
どうやつて
昔の跡をいかで

知る
まし

反実仮想【体】

だろうか、(いや、知るはずもない)。